

歴史家陳垣と『通鑑胡注表微』

——日本軍占領下の北平で——

伊 東 昭 雄

一、序論——日本軍占領下の北平とその周辺における抗日闘争——

二、陳垣の生涯と学問

三、『通鑑胡注表微』について

(イ) 民族意識——夷と夏——

(ロ) 「価値のある死に方」と「意義のある生き方」

(ハ) 隠逸について——胡三省の抵抗——

(ニ) 中華思想と中国文化

四、結び——中国史上の南渡——

* * * * *

一、序論——日本軍占領下の北平とその周辺における抗日闘争——

本稿で取り上げる陳垣の著作『通鑑胡注表微』は日中戦争の末期、日本軍占領下の北平で書かれた。後に詳述するように、本書の内容は当時の著者を取りまいていた環境と密接に関わっている。そこで本題にはいるに先だって、当時の北平とその周辺のおかれていた状況および国内状況を、とくに著者との関連を重視しながら考察しておきたい。

「満州事変」とその翌年の傀儡国家「満州国」の成立後も、日本軍の侵略行動は東北地区のみに止まることなく、しだいに華北および内蒙古に拡大し、一九三五年一月には傀儡政權冀東防共自治委員会（後に自治政府）を成立させた。こうした日本軍の一連の侵略行動に対して、国民党政權は「安内攘外」政策を採り続けたが、北平の学生・市民の間にはしだいに抗日の要求が強まり、政府の弾圧にめげず、一二・九運動を起こした。抗日運動の高まりにもかかわらず、日本軍の華北侵略政策は止まず、翌三六年には内蒙古における徳王の自治運動を利用して、閔東軍の影響下に「蒙古軍政府」を樹立した。^{（補註）}これに対して、中国国内における「一致抗日」の世論はますます強まり、そのような動向を背景に、年末には張学良・楊虎城らの起こした西安事変をきっかけとして、民衆が久しく待望していた「内戦停止・一致抗日」の要求がともかくも実現したことは、周知の通りである。それまで日本は国民党と共産党の間に楔を打ち込み、両者の対立を利用して対中国侵略政策を推進してきたが、これからは国共合作を核とする、統一された中国民族を相手とせざるをえなくなった。やがて結成される抗日民族統一戦線がこのことを象徴している。蘆溝橋事件をきっかけとして、戦場を華北からさらに華中・華南へと拡大した日本軍は、かくして中国の全民族的抵抗に直面したのである。日本軍は七月末には平津線を突破し、やがて北平・天津を支配下に置いた。

この地区の住民にとって、八年にわたる苦難と抵抗の日々が始まったのである。北京地区で起こり、日本の世論を刺激した通州事件は、日本政府が不拡大方針を放棄してからまもなく、傀儡政権である冀東防共自治政府の保安隊が起こした事件であり、この地区における抗日闘争はその後も北京周辺でたゆまず続けられた。北京市内では日本軍ややがて成立する傀儡政権の制圧下で、表だった武力闘争を行うことは困難であったが、それでも密かに様々な形での抵抗が続けられた。

北京は五四運動以来、しばしば学生の愛国・救国運動の中心地となり、日中戦争の前夜には一二・九運動がこの地で大きく盛り上がった。したがって北平を占領した日本軍はこの地に開かれている諸学校、なかならず大学に対して統制を強め、抗日運動を厳しく抑圧しようとした。そこで北平に進駐した日本軍は故宮・天壇・旃檀寺などととも北京大学・師範大学・北平大学・清華大学を占拠し、開講を許さなかったが、外国の息のかかったミッション系の学校だけは例外的に開講を許可した。この前後から北平の学生界や教職員の間で大混乱が起こり、万を数える学生たちが平津地区を去って奥地に移動し始めた。学生たちの多くは南方を目指し、戦局の拡大につれてさらに西南へと移動した。そして日本軍占領下では開講できる希望のない北京大学を始め諸大学は移動することを決定し、北京大学・清華大学と天津の南開大学は合併して長沙臨時大学を設立し、北平大学・北平師範大学・北洋工学院は西安臨時大学をつくることを決めた。こうして多くの学生・教職員の南方への移動が始まったので、これを当時「南遷」または「南渡」と呼んだ。この「南遷」または「南渡」は戦場の拡大とともに四川・雲南・貴州にまで及び、昆明を中心地として国立西南聯合大学の樹立に漕ぎ着けた。

このように学生・教職員たちの平津地区からの移動が続き、陳寅恪を始め、親しい友人たちの多くが次々と「南

渡」するなかで、陳垣の胸中にはどのようなものであったろうか。そのことについて、当時もその後も彼自身が直接語った言葉は見当たらないが、彼の周辺にいた人の言葉によれば、彼もまた「南渡」の意向を漏らし、彼が校長を務める輔仁大学のドイツ人の校務長から涙ながらに説得されて思いとどまったということである。輔仁大学はミッシェン・スクールであったため、さすがの日本軍の抑圧も厳しくは及ばず、当時の北平で開講されていた数少ない大学の一つだった。そのような情勢の下で、多数の学生がこの大学に集まり、他の大学で職を失い、「南渡」できなかった教員たちがこの大学に生活の糧を得ていたから、彼としてはとても校長としての職務を放棄するわけにはいかなかったものと考えられる。確証はないものの、彼が北京に止まったのは苦渋の選択であったのではないか。彼は後に一九四九年初め、中共軍による北京解放の際、胡適から脱出の誘いを受けて、この時ははっきりと断っている。もちろんこの時と日中戦争中とは全く事情が違うが、この時の彼の公開書簡(註)を読めば、彼の決断はきわめて明快であり、一点の迷いもなかったと考えられる。それに比べると、日中戦争中に彼が「南渡」を断念したのは決して明快な決断ではなかったと考えられる。

二、陳垣の生涯と学問

『通鑑胡注表微』の内容について論ずるに先だって、歴史家陳垣の略歴と研究、さらには日中戦争後から新中国成立後に至る彼の生活について、あらましを見ておこう。

陳垣は一八八〇年十一月十二日、広東省新会県石頭郷富岡里に生まれた。父は陳田といい、葉材商人だった。新会県といえば、梁啓超を思い出す人が少なくないと思われるが、人柄においても学問においても、両者の共通点は

ほとんどない。ただ陳垣が歴史家としては国際的感覚が豊かだったのは、彼の出身地と関係があるかもしれない。新会県は広東省の珠江デルタ地帯に位置し、諸外国の影響を受けやすい土地柄だった。

五歳の時父に従って広州に出て、その後私塾に入って勉学を始めた。古典を学びながら八股文を練習し、一八九七年十八歳の時郷試を受験して失敗している。その後一九〇一年に秀才の試験に新会県中第一位で合格したが、府試では「奇異なる議論あり」ということで危うく不合格になるところだった。この年清朝政府が八股文廃止の詔勅を出したので、科擧の勉強を止め、歴史の研究と現実の政治・社会に関心を注いだ。その後広州で『時事画報』が創刊されると、彼はこれに参加して革命理論を宣伝する文章を書きながら、中学校の教師をしていた。〇七年アメリカの教会が経営する博済書院に入学して医学の勉強を始めたが、アメリカ人教員が中国人教員・学生を蔑視するので、友人と光華学院を創立して、ここで学びながら、他の学校の教師を兼任した。その頃の彼は近代医学および医学史の研究に精力を傾注し、『医学衛生報』に医学および医療制度についての論文を書き始めた。一〇年に光華書院を卒業したが、引き続き同学院に止まって教員をしながら、『震旦日報』を創刊して主編となり、革命運動を支援した。この当時彼が執筆した文章は後年に『陳垣早年文集』[△]という一冊にまとめられている。

辛亥革命後の一三年一月、彼は新聞界から選ばれて衆議院議員として北京に移住し、医学を止めて政治に携わった。これ以後彼は北京に定住し、旅行を除いてはここを動いていない。その後議員として活動しながら、一七年からは宗教史の研究を始め、『元也里可温考』を完成し、出版している。一二年教育部次長となるが、半年ほどで退き、北京大学研究所学門の指導員となり、京師図書館（後の北京図書館）館長を兼任した。この頃から宗教史や元代史の研究を旺盛に行なっており、これから日中戦争前の十数年間が彼の生涯でもっとも学問的に充実した時期

であったといえる。しかし三十年代に入ると、日本軍の華北工作が拡大して、京津地区はしだいに暗雲が立ち籠めてきた。そして蘆溝橋事件後、日本軍の軍事行動によって、この地区の情勢は一変した。

蘆溝橋事件後、とくに日本軍が北平市内に進駐すると、市民たちは大混乱に陥り、陳垣自身も苦しい選択を迫られたことはすでに述べた。戦争末期、彼は、門を閉ざしてすることもないので、胡三省の元代復刻本『資治通鑑』を読んで気を紛らわしていた、と『通鑑胡注表微』の「小引」で述べているが、もとより彼は歴史家であると同時に、輔仁大学校長でもあったのだから、ひたすら門を閉ざして蟄居しているわけにはいかなかった。傀儡政権もこの大学に対してはいくらか干渉を控えはしたが、それでもしばしば、日本語を学習せよ、日本語の教科書を用いよ、校門に日章旗を掲揚せよ、と迫り、そのたびに陳垣校長やドイツ人の教務長が対応せねばならなかった。教職員や学生が抗日宣伝を行ったかどで逮捕されるといふ事件も起こっている。そればかりか、日本軍・傀儡政権の派遣した人物が彼を訪れ、脅しや誘いによって彼を傀儡政権側に協力させようとしたこともあり、彼は死をも恐れぬ毅然たる態度でこれに対した。こうしたことが続くと、彼も人に会うのが億劫になり、門を閉ざして蟄居し、『通鑑』その他の読書にわずかな慰めを見出だしていたことであろう。このような環境にあったにもかかわらず、否むしろそうであったからこそ、彼はいつそう研究への意欲を燃やし、『明季滇黔仏教考』・『清初僧諍記』や『南宋初河北新道教考』とそれに『通鑑胡注表微』などの優れた著作を次々と完成させた。これらの著作には当時の彼の信念や生活態度が反映しているが、このことについては本論で詳述する。

抗日戦争後は研究生生活に戻ったが、やがて国共両党の対立が激化し、飢餓と内戦に反対し、和平と民主を求める学生デモが各都市に広がり、陳垣の勤める輔仁大学の学生も逮捕された。このような情勢の中で、彼はまたもや

研究だけに専念しているわけには行かなくなった。内戦は民衆の支持を得た共産党軍に有利となり、ついに一九四九年一月北平和解放を迎えた。その頃国民党はたびたび飛行機を派遣し、著名な学者を南下させようとしたが、陳垣は頑としてその招きに応じなかったことは、すでに見た通りである。北平和解放の前夜、胡適は陳寅恪を伴って南京に脱出していた。

陳垣は胡適に宛てた公開書簡の中で、北平解放について述べている——「今年一月末、北平は解放されました。解放後の北平には、新しい軍隊がやってきました。それは人民の軍隊です。新しい政権が樹立されました。それは人民の政権です。新しいものがすべてやってきました。すべては人民のもので、私は七十歳の年まで生きました。今になって始めて真の人民の社会を見ました。それは歴史上かつてなかった新しい社会です。新しい社会は現実の教育を通じて、私に新しい思想を受け容れさせてくれました。それは私がこれまでずっと知らなかったものです。あなたは「全く自由がない」といわれるでしょうか。私は現在人民が自由に生活し、青年・学生たちが自由に学び、討論し、教授たちが自由に研究しているのをこの目で見ています。私はきっぱりと申しますが、この解放区（七）のなかにこそ真の自由があるのです。私はこれまでずっと騙されてきました。「胡」適之先生、あなたもまた私を騙していたのではありませんか。」と。公開書簡というものの性質上、表現が厳しく、断定的になっているのかもしれないが、新しい人民の社会への満腔の期待が読み取れる。当時の陳垣はマルクス主義の理論や『毛沢東選集』を学び、それを受け容れる心境になっていた。それというのも、彼自身はつきりとはいっていないが、国民党政府の腐敗と独裁にほとほと愛想が尽きていたということがあろう。

新中国成立後の彼は歴史研究を再開したが、さまざまの役職に就き、人民代表大会代表となるなど、政務も多忙

になったようである。一九五一年夏には西南土地改革工作団団長として、四川省巴県の土地改革に参加している。土地改革に参加して彼がどんな感想や意見を持ったか、恐らく資料が残っていると思われるが、筆者は今のところ残念ながら目にしていない。ただその後、十月に全国政治協商會議第一期第三回會議が開かれ、陳垣はとくに委員として招かれ、「教師たちは自己教育と自己改造に努力しなければならない」という題で発言し、會議の後毛沢東が彼の席に行き、親しく語り合った。その時陳垣は、「私は解放後になってやっとあなたの書かれた『民主主義論』を読みました。私は道を聞くのが遅すぎましたが、努力して追いつかなければなりません」と語ったという。最後の宴会の席上で、毛は陳を他の人に紹介して、「この人は陳垣先生だ、たいへんな読書家で、われらの国家の『国宝』だよ」といったということである。史書を愛読して止まなかった毛沢東としては、大いにありうることと思われる。

その後の陳垣は政治的・社会的な仕事が増えて、大学への出講はしだいに少なくなった模様である。五二年夏、大学間の調整によって、輔仁大学と師範大学とが合併し、北京師範大学となって、陳垣が校長に任命された。公務多忙にもかかわらず、研究はたゆまず続けられ、その成果は次々と公表された。その後五九年一月、共産党に入党したことが確認されている。文化大革命の時期を彼がどう過ごしたか、詳細は今のところ何も報告されていない。ただ一つ、六九年初め、周恩来の配慮で身边を世話する工作員が配備されたことが知られる。いまだ文革の続いていた一九七一年六月二十一日に、彼は九十一歳で逝去した。

以上が陳垣の生涯のあらましであるが、いうまでもなく、彼は傑出した歴史家であり、数え切れぬほどの優れた研究論文・著書を残しており、それらのほとんどすべてが『陳援菴先生全集』全十六卷(十二)に集められている。その内

容を見ると、五代史・元代史・宗教史など実に多岐に及んでおり、私自身その研究成果を吸収するには、膨大な年月を要すると思われるが、日本軍占領下の北平で書かれた珠玉の著作から始めて、逐次検討を加えていきたいと思う。今回はその手始めとして『通鑑胡注表微』^(十一)を取り上げる。

三、『通鑑胡注表微』について

『通鑑胡注表微』という本書の標題のうち、『通鑑胡注』というのは、いうまでもなく北宋の士大夫司馬光の編纂した史書『資治通鑑』に、南宋の胡三省が全編に注を付けたものである。『資治通鑑』自体ももとより膨大な著作であるが、これの全編に注を付けるのもたいへんな仕事である。胡三省は宋王朝滅亡後も、モンゴル人の建てた元朝に仕えることなく、『通鑑』の注の作成に没頭し、二十数年をかけてついに完成した。胡三省がこの仕事にどれほどの執念を燃やしたのにはそれなりの理由がある。後で詳しく考察するが、『通鑑胡注』というのはただ単なる字句や地名の考証のみではなく、そのなかには胡の思想や民族意識が豊富に含まれている。「表微」というのは注のなかに潜んでいる彼の思想を掘り起こそうということである。もっとも書名が「表微」に決まるまでには繰り返し推敲を経ているのだそうで、「最初は『通鑑胡注述義』としたが、『述義』は後に『輿論』さらに『探微』と改め、最後になってやっと『表微』と決まった」ということである。^(十二)だから『通鑑胡注』も陳垣の『表微』ももとは考証学の書物であり、考証の方法はきわめて厳密なものがあるが、しかし考証だけで事足りるとはしていない。『表微』には「考証篇第五」があるが、その冒頭に「胡注が地理および考証に優れていることは、今日の学者は知らない者はない。書名を『表微』というが、微（秘められたことば）でなければ、なにも表出することはない。

思うに、考証は史学の方法の一つであり、実事求是を心掛けるならば、考証は不可欠である。胡三省は一生涯考証に従事したが、考証で史学の能事を尽くしたと考えるならば、もとより間違っているけれども、考証を馬鹿にして歯牙にもかけないならば、これもまた正しいとはいえない」と陳垣は^(十四)いっている。しからは厳密な考証に基づきなからも、単なる考証を越える「表徴」とは何か。そのことを本書の内容に即して検討して見よう。

『通鑑胡注表徴』は全部で二十篇から成る。^(十五)「前の十編は歴史の方法について、後の十編は歴史の事実について論じ」たと著者はいっているが、前半と後半とで論述の仕方に大きな違いはない。各篇は冒頭に二字下げて陳垣のコメントがあり、その後一字目から『通鑑』の本文が引用され、その次に「注曰」として胡注が一字下げて引かれており、その後二字下げて著者の注が付けられている。本稿も引用に際してそのやり方を踏襲するが、はっきり区別するために、著者のコメントと注には「援庵曰く：」と添えることとする。

(イ) 民族意識——夷と夏——

開卷の「本朝篇第一」は胡三省にとって自己の属する王朝である宋朝に対してどんな意識を持っていたかを、宋朝に対する呼称を通じて明らかにしている——

「援庵曰く：本朝とは父母の国をいう。人はみな父母の国を持ち、本朝に対する呼称を見れば、父母の国に対する感情の厚薄がわかる。胡身之の現行本『資治通鑑注』は宋滅^(十六)後に著述されたので、『四庫提要』はこれを元人の著作としている。しかし彼の宋朝に対する呼称を見れば、実は彼が一日も宋を忘れていなかったことがわかる。大体において全書中第四十卷から第二百二卷までの間では常に宋を「わが朝」と呼んでいるのに、そ

の前後ではおおむね宋を「宋」もしくは「宋朝」と呼んでいるのは、元末に版木を彫った時に改めたのではないかと大いに疑っている。内向きのことばであったものが身之の原文である。今全書の巻数の順序に従ってその例を列挙して見ると次のようである――

秦の二世二年、陳嬰は楚の上柱国となり、五県の邑に封ぜられて、懐王と呼怡に都を置いた。

注に曰く：『漢書』の「地理志」によれば、呼怡県は臨淮県に属している。『史記正義』にいう、「今の楚州である」と。宋は泗州に属する。(巻八)

漢の高祖五年に漢王は引き返して定陶に至った。

注に曰く：『漢書』の「地理志」によれば、定陶県は済陰郡に属する。昔の陶邑は宋には広洛軍の管轄となった。

(巻十一)

援庵曰く：この二条は冒頭の数巻にあるが、どちらも単に「宋」とだけ称しており、本朝人の言葉らしくなく、身之は父母の国に対して無関心であるかのように見える。しかし後文の例によれば、原稿には当然「我が宋」と称していたはずで、版木を彫る時に「我」の字を削ったのである。『四庫提要』は黄傳の『簡籍遺文』を引き、この本は元末に臨海で刊行されたといっているが、何年であるかを明示していない。しかし元統二年(一三三四年)に編纂を終えた『元文類』はすでに「胡三省新注通鑑序」を載せているから、その刊行はきつと『元文類』の完成する前であったに違いない。序の中には「宋の英宗皇帝」云々とあるが、現行本『通鑑注』の序は「宋朝の英宗皇帝」となっている。思うに「我朝」とあるのを、版木を彫る時に「宋朝」と改めたものを、蘇天爵がさらに「朝」の字を削ったのだろうか。『元文類』のもの名が『国朝文類』であったのを、後

人が『元朝文類』に改め、さらに『元文類』と呼んだようなものである。至正三年（一三四三年）に『宋史』編纂の詔書が發布された時は『通鑑胡注』が刊行されてすでに十余年経っていたが、『宋史』「芸文志」に記載がないのは「胡を」元人とみなしたからである。『千頃堂書目』、『史学類著録』、『通鑑釈文辨誤』は胡を宋人としてゐるが、『編年類著録胡注通鑑』もまた彼を元人としてゐる。^{十七}

このように胡注のなかに、胡は宋朝のことをある時は単に「宋」とだけ書き、またある時は「我宋」・「我朝」と書いたりすることに疑問を持ち、とくに『通鑑胡注』が元朝の支配下で刊行されていることに着目し、このような宋朝に対する呼称の不統一が版木の作成と刊行の過程で起こったことを推定している。もちろんこれらのことを完全に実証することは不可能であるが、しかしながら推定は十分に説得力を持ち、しかも推定の過程で胡の宋朝に対する思いと元朝の支配に抵抗する意志が明瞭に浮かび上がってくる。ここに陳垣のいう「表微」の単なる実証とは違った特色がある。

もともと宋とくに南宋の時代は、南北朝や明末清初などと並んで、中国が異民族の侵攻に悩まされ、したがってもっとも民族意識の強烈な時代であった。中国人（漢民族）の異民族に対する意識は古く『書経』や『春秋左氏伝』・『春秋公羊伝』などに中華思想と結合して表れ、秦漢帝国においても、異民族に対しては歴代の皇帝や宰相たちが常に意を用い、軟硬さまざまの対外政策を採用して匈奴その他に対処していた。唐王朝の築いた中華的世界帝国は一時周辺の異民族を制圧し、中国の側から見れば、対外関係のもっとも安定した時代であった。^{十七}しかし中国の王朝と周辺異民族との関係は、当然のことながら、それぞれの勢力関係の変化によって常に影響を受ける。唐代後半以降、とくに宋・元・明・清の時代はいつも異民族の侵攻に怯え、しばしば異民族の征服・支配を受ける時代にはいっ

た。胡三省の生きた時代は南宋末・元初というもとも異民族の圧迫・支配の厳しい時代であり、そのなかで彼は元朝の支配への抵抗の姿勢を崩さなかったから、彼の民族意識は勢いきわめて鋭いものとなった。その意味では、日本軍制圧下の北平で日本軍や傀儡政権への協力を拒否した陳垣は胡三省の民族意識や元朝支配への抵抗にもっとも共感しうる立場にいたことは確かである。彼は「夷夏篇第十六」の冒頭で次のようにいう――

「援庵曰く：夷夏とは夷と夏を区別する觀念であり、現代の言葉で言えば民族意識である。『春秋公羊伝』成公十五年に「春秋の世には自己の封国を内とし、諸夏（他の封国）を外としていたものが、諸夏を内として夷狄を外とするようになった」とある。これは自己を尊んで他人を見下すことではなく、内外・親疎を区別するのは自然の感情であり、夏が夷に対して持っているだけでなく、夷が夏に対しても同様に持っている。これを民族意識という。国家が平和で統一されていけば、この意識ははっきりとは顕れない。しかし国土が侵略され、もしくは分割されている時には、この意識はとくに顕著に顕れる。身之は民族意識の顕著な時代に生きたので、これを理解して大いに發揮することができた。そういう時代でなければ、『通鑑』を読んでも、そこに含まれている深い意味を理解することなどとてもできるものではない。」^{十△}

確かに胡三省と陳垣の生きた時代の共通性が陳の胡注に対する鋭い分析と理解を支えていたことは疑う余地がなく、そこに本書の大きな成果があったことは間違いないが、彼以前に先駆者が全くいなかったわけではない。そのことは本書の末尾に付けられている膨大な「徵引書目略」を見てもわかるが、なかでも重要なのは王船山の『読通鑑論』と顧炎武の『日知録』であろう。二人とも胡三省や後の陳垣と同様「民族意識の顕著な時代」に生き、異民族の支配と圧迫を体験した人物である。顧炎武について、陳垣は次のようにいう――

「唐の高祖の武徳二年、これより先皇帝に遣わされて、礼物を奉じて突厥に使者として派遣されていた右武侯將軍高靜が豊州に至った。

注に曰く：豊州は漢の朔方の臨戎県の地で、隋の開皇五年に豊州を置いた。大業年間に州を廢して五原郡とし、唐にはまた州に戻した。大元は豊州に天徳軍節度を置き、大同府路の属地とした。(卷一八七)

援庵曰く：この項もまた「大元」と呼んでいるが、『日知録』は引いていない。『日知録』卷十三の「本朝」の項には、「宋の胡三省は『通鑑』の注を書き、注の中では宋をすべて『本朝』または『我宋』と呼んだ。地名の注釈をする時はみな宋の州県名を用いた。ただ百九十七卷の『蓋牟城』の下には『大元の遼陽府路』と注を付け、『遼州城』の下には『大元の遼陽府』と注している。宋にはこの地「名」がなかったので、やむをえずこのように書いたのである」とある。顧炎武のこの言葉は正しく身之の意の存するところを言い当てている。しかし注では「宋を」すべて「本朝」とか「我宋」とか呼んでいるかといえ、かならずしもそうではない。全注のうち、「本朝」もしくは「我宋」と呼んでいるのは数項に過ぎず、その他はみな「我朝」、「宋朝」あるいは単に「宋」と呼んでいる。「大元」という呼び方も百九十七卷から始まるわけではない。」(「本朝篇第一」)ここでは陳垣は顧炎武の誤りを訂正しているが、『日知録』の記述から示唆を受けていたものと考えられる。陳垣は胡三省と同時代人の著作、例えば王応麟の『困学紀聞』や周密の『癸辛雜識』——いずれも『徵引書目略』に載っている——などからも多くのことを読み取っていた。『通鑑胡注』やこれらの書物を読むことが、彼が日本軍占領下の北平に暮らしながら、あくまで妥協を拒否し続ける心の支えとなっていたと思われる。

(口)「価値のある死に方」と「意義のある生き方」

南宋末から元初にかけて、動乱期を生きぬきながら『通鑑』の注を書き続けた胡三省を支えたものは、宋朝に対する彼の思いに表れている民族意識があったが、その民族意識は実際の行為においてどのように現れるのだろうか。そのことについて、陳垣は「臣節篇第十二」でこういっている――

「援庵曰く：臣節とは人臣が君に仕える大切な節義である。『春秋公羊伝』莊公四年の伝には「国と君とは一体である」とある。だからその当時君に忠であるのは国に忠であることになる。国に忠であるということは、国が存すればともに存し、国が滅びればともに滅びることである。国が滅びても「己が」滅びないということとは国境を守る責任を果していないといつてよい。国が滅びようと滅びまいと、自分の封禄と地位を保全しようと思うのは、決まって愚鈍無恥、売国貪利の輩である。だから身之が臣節を論ずる際は、身命を捧げようことを第一義とし、節操を堅持して「敵に」仕えないことを第二義とする。禄位を保持して祖国に背く者はかならず斥ける。いわんや敵国を助けて祖国に仇なす者はなおさらである。」^(二十七)

そして身をもって国に殉じた歴史上の例が上げられる。

「後周世宗顯徳五年、周の兵は楚州を攻め、四旬にわたったが、唐の楚州防禦使張彥卿は守りを堅くして降伏しなかつた。皇帝は將軍たちを督励して攻め、彥卿と都監鄭昭業はなお兵士を率いて防戦したが、ついに刀折れ矢尽き、彥卿は繩牀「繩で作った安樂椅子」に上り、闘い続けて死んだ。率いていた兵士千余人は死ぬまで一人として降伏する者がいなかった。

注に曰く：唐は淮南を失ったが、城内や国境で死んだ者が何人もいた。(巻一九四)

援庵曰く：これは宋末に国を売って投降する者が多かったのを嘆いて、「国境で死んだ者が何人もいた」といっているのだ。徳祐元年、常州を守った時のことは『宋史』の「本紀」および「忠義伝」に載っており、その事実がはっきりと記されている。それについては「解釈篇」参照。『宋史』によれば、都統の劉師勇は囲みを破って逃れたとあるが、王逢の『梧溪集』二によれば、師勇もまたついに降伏せずに死んだのであった。ただ当時節義に殉じた諸臣については、『宋史』には載せていないが、『元史』には散見し、『二十二史劄記』に補われているものがそれである。史書に散見しているものとしては、たとえば『宋季忠義録』に採録されているものがあり、これに類するものは少なくない。『高啓昇藻集』四には「晋陵胡應炎伝」があり、常州の守護のことを述べている。それには「私が子供だった時、老人たちが元兵が常州を取った時の様子をたいへん詳しく話してくれたのを聞いたことがある。壮観な歴史については史書も載せていないことが多いが、収集されたものが失われてしまったのか、それとも著作者が忌避するところがあつて収録しなかったのだろうか。あるいはまた、間違ひが多く、好事家たちの諸説紛々のためだろうか。いつも残念に思う。最近胡翰に長江の船上で会い、密かに私のために祖先の應炎が節義に殉じた顛末を語ってくれたが、私が昔聞いたことと違ひはなかった。これは証拠とすることができる。そのことをば集めて、「胡應炎伝」を作り、史官の至らぬところを補う」とある。しかしそこに述べられていることは『宋史』「忠義伝」の陳炤の事績と酷似している。正史は恐らく『道園学古録』四四にある虞集の作った「陳炤伝」によつてゐるのだろう。胡と陳とは同郷であり、官位も同じ通判であり、正史は陳炤としてゐるのに対し、こちらは胡應炎としてゐる。忠義な人の名は人々が共に愛していることがわかる。だから常州忠義祠は陳・胡を並べて祭つてゐる。『亥餘叢考』三五を見よ。

唐の張彥卿が楚州を守り、率いる兵士千余人が死ぬまで一人として投降しなかったことは歴史上美談となっている。私は曾國藩の「同治三年金陵（南京）奪回の上奏文」を読んだが、それには「洪逆（洪秀全の率いる太平軍）が広東西部に乱を起こして以来十有五年、金陵を不当に占拠してからも十二年が経ちました。その間彼等が蹂躪した地方は十六省に及び、占領された都市は六百余城にもなりました。逆党凶首のなかでも、馮官屯を守った李開方、九江を守った林啓容、安慶を守った葉芸来はみな堅忍不屈でした。この度金陵城が破れましたが、十余万の賊兵は一人として投降せず、集団で焼身しても悔いませんでした。誠に古今まれに見る激賊であります」といっている。『曾國藩奏稿』二十を見よ。相手方の一言は自国の宣伝に勝る事千万倍である。もとより勝敗は論ずるまでもない。南方の人々は一戦にも耐えぬなどということがあろうか。これこそ忠義の熱誠を喚起するものだ（干）」

このように世の人に称えられている、忠誠を全うした人達は「意義のある生き方、価値のある死に方」をした人達である。陳垣はいう――

「援庵曰く：人は意義のある生き方、価値のある死に方をすべきである。このことは泰平の世にはあまり自覚されないが、乱世には心がけねばならない。孔子が「生も知らないのに、どうして死など知ろうか」（先進）といて以来、人々は儒家は生死を論じないものと思ひ込みがちであるが、「死ぬも生きるも天命だ」（顔淵）というのは儒家が常々述べていることであり、『論語』一冊を取ってみても、生死への言及はいくらでもある。

「人は真つ直ぐに生きるもので、そうでなければ幸いに死なずにいるだけだ」（雍也）というのは、人は意義のある生き方をすべきであることを述べている。

「素手で虎に立ち向かったり、歩いて黄河を渡ったりして、死んでも悔いない人とは仲間にならない」(述而) というのは、価値ある死に方をすべきだといっている。

「斉の景公は馬を四千頭もっていたが、死んだ後恩恵を受けたと称える民は一人もいなかった」(季氏) というのは、意義のある生き方をしなかつたといっている。

「伯夷と叔斉は首陽山の麓で餓死したが、民は今もなお二人を称えている」(同前) というのは、価値のある死に方をしたということである。

価値のない死に方とは「名もない男女が約束を守って谷川でくびれ死ぬ」(憲問) のがそれである。

意義のある生き方とは「管仲は「斉の」桓公を助けて諸侯に覇者として臨み、天下を統一した」(同前) というのがこれである。管仲の生き方には子路や子貢は疑いを持ったが、孔子だけが彼を仁者だとしたのはなぜか。桓公と公子糾の兄弟が国を争ったのは内乱だが、蛮夷が中国を侵すのは外患である。「管仲がいなければ、私達は蛮夷の服飾を強制されていることだろう」(同前) という孔子の言葉は内外・軽重・生死について、何が正しいかを徹底して分析しており、生を貪る者がかりそめに口実にし得る言葉ではない。

胡身之は乱世を生きただので、生きるべき時と死ぬべき時を誤らないことを心にかけていた。だから注では常に人が長生きし過ぎたことを惜しんでいるが、それはその人の生が無意義であるからである。また常に死に場所を誤った人を非難しているが、それはその人の死に価値がないからである。ここにとくにそのことを明らかにしておく⁽¹⁰⁾」

しかし「意義のある生き方」と「価値のある死に方」をするなどということは実際にはそう簡単にできることで

はない。一体どうすれば、そんなことが可能なのか。そのことについて、胡三省があげている実例と、それに対する陳垣のコメントを見よう。

「後周の世宗顯徳四年、蜀の李太皇後は軍隊の責任者の多くがしかるべき人物を用いていないのを見て、蜀主に「私の見るところ、高彦儔だけが太原で古くから仕えている人で、この人はあなたに背くことはないでしょうが、その他は任用できません」といった。しかし蜀主は従うことができなかった。

注に曰く：孟氏が滅びるに及んで、わずかに高彦儔一人だけが死をもって国に殉ずることができただけだった。蜀主が死んだ時には、その母は食事を取らずに死んだ。婦人がこれほど節義を守ったので、男子の多くが恥じた。
(卷一九三)

援庵曰く：これは宋の楊太后が国に殉じたことに感動しているのである。新会の崖山に大忠祠があり、宋の丞相文天祥、陸秀夫、枢密使張世傑を祭っている。また全節廟があり、慈元殿ともいい、楊太后を祭っている。廟には陳白沙先生の書いた慈元廟碑ならびに書があり、文は『白沙集』一に載っている。また白沙の弟子張翹が全節廟碑をつくり、「后は度宗の貞淑な妃であった。異国の兵が臨安（杭州）に攻め込んできた時、帝后王臣はことごとく捕虜となったが、ひとり楊太后だけがその子の益王昰と広王昺を背負い、海を渡って崖山に走り、陸秀夫ら二三の大臣によって、臥薪嘗胆して国家の復興を図った。後に異国の兵が崖山に迫り、陸秀夫はもはやこれまでとわかると、皇帝の鼻を背負って海に入った。后はそれを聞くと、胸を撫でて激しく慟哭し、『私がこれまで艱難を厭わなかったのは趙氏の一塊の肉を守るためだった。今は何の望みもない』といい、入水して果てた。思うに、宋代三百年のなかで、賢明な后妃としては、先には高、曹の后があり、後には向、孟

の各后が称えられ、みな艱難を厭わなかった。しかしいづれも平常にあって正しく行動できたのである。各地に流離して艱難に耐え、天下の大義を高く掲げ、一君が滅べばまた一君を立て、身をもって殉じた。その死は天下のため、国家のため、人倫のための死であり、内外・華夷のけじめを厳しく守るために死ぬのであって、同じ死でも泰山より重い死があるといわれる死であり、世の教えを守るのに大きな役割があった」と書いている。この文は『道光新会志』四に載せられ、后が価値ある死に方をしたことを十二分に明らかに示している。

全謝山の「慈元全節廟碑跋」には「宋の楊太后は崖山の難に殉じた。明の弘治年間になって、布政使劉大夏が初めてこの人のために廟を建て、陳先生がそのために文を献じ、初めて碑をつくった。陳先生の書法はとりわけ見事で、慈元廟碑を書くにはとくに心を込めており、私は廟を参詣して碑文の拓本を取り、跋として詩を作った。その詩には『高、曹、向、孟みな賢后なるも、なお芳魂あり落照に殉ず、一に盟約せし臣妾の辱めを濯ぎ、虞淵「たそがれ」に二王を抱きて帰る』とあり、我ながら出来がよいと自慢しており、陳先生の碑文に付けて伝えてよい」とある。跋は『鮎埼亭集』三十八を身よ。曹、高、向、孟は仁、英、神、哲四宗の後である。高、曹は曹、高とすべきで、謝山がたまたま張の碑文を写していて間違つたのである。楊太后が国に殉じたのには、身之のいうように、「男子の多くが恥じた」のである。^{〔十五頁〕}

確かに楊太后や文天祥、陸秀夫、張世傑らは宋朝に殉じ、しかも人倫を守り、内外・華夷のけじめを守るために死んだのだから、「価値のある死に方」をしたといえる。しかし胡三省は結局「価値のある死に方」をすることができなかった。その意味で彼もまた多くの「恥じた男達」のひとりであった。「価値のある死に方」をすることができなかつた彼は一体どうしたらよいのか。「価値のある死に方」ができなかつたら、「意義のある生き方」をする

しかないことになるが、それはどのようにすれば可能なのだろうか。

(ハ) 隱逸について —— 胡三省の抵抗 ——

胡三省にとって、もはや「価値のある死に方」が不可能となり、「意義のある生き方」を求めるとすれば、それは前に触れた臣節の第二義、つまり「節操を堅持して敵に仕えない」ことである。陳垣は胡三省の生き方を眞の隱士のそれであったと考えている。

「宋の文帝二十九年、尚書令何尚之は年老いたので、辞任させていただきたいと願い出、方山に隱棲したが、尚之は志を固持できないだろうとだれもが議論した。詔書による懇切な呼び出しを四度受けた尚之は再起して職務に就いた。御史中丞の袁淑は昔から痕跡だけあって名の知られていない隱士を記録し、「真隱伝」をつくって「尚之を」あざ笑った。

注に曰く：「痕跡だけあって名の知られていない」というのは、たとえば晨門、荷蕢、荷蓀、野王二老、漢陰丈人のような人のことである。(卷二二六)

援庵曰く：私が思うに、身之もまた無名の隱士といつてよからう。身之は宋の滅亡後世間を謝絶し、その後二十六年して没した。今身之の行状を調べてみると、わずかに『袁桷清容集』や『陳著本堂集』には一二拠り所となる詩文があるが、その他の著述には彼に言及しているものは少ない。『清容集』では、甲申・乙酉（至元二十一年・二十二年）の間に「身之が」蔵書借用のため、一度袁氏の塾に滞在している。『本堂集』では彼が晩年子のために婚姻を陳氏に求めている。陳氏もまた甬の人で、かつ同年進士でもある。しかるに『本堂集』を見ると、彼は甬にいた時、陳氏と会っていないことがわかる。『鮎埼亭集外編』十八と『胡梅磧蔵書窖記』

には「身之が甬にいた時、王深寧と語り合ったことはなかったが、そのわけはわからない」とある。これで身之が人と軽々しく往来しなかったことがわかるのだ。王梓材が『宋元学案』を校訂・出版した時、身之を涑水（司馬光）への私淑者のなかにいれなかったが、道光初年に陳僅がつくった『深寧年譜』では身之を深寧の門人に入れたのは、いかにも軽信している。深寧の著した『赤城書堂記』には、たった一度だが身之に言及しており、それには「台州の寧海は、前代の賢者に赤城先生羅德業があり、元祐時代（北宋、一〇八六一—一〇九四年）の名臣だった。同郷の大学者で前代の進士胡元叔は羅公が旅先で足を止めた地に書堂を創立し、近隣の俊英な子弟を集めて育成した。前代の進士孫鈞、趙孟礼、胡三省、前代の太学陳應嵩、劉莊孫の諸君を招いて監督してもらった」云々とある。胡元叔とは身之の叔父であり、孫鈞と同年の景定三年の進士だった。孫鈞は身之の墓誌に名号を書いてくれた人である。この記述によれば、深寧は身之が知っていることを知っていたとはいえるが、身之が深寧の門人であったとはいえない。また宋景濂が書いた「通鑑綱目附釈序」では、胡三省は史炤と並び称せられてはいるけれども、方正学が書いた「劉莊園文集序」では、寧海の先輩を数え上げてはいるが、身之には及んでいない。そこには「寧海は宋の時代には詩書文物の里であり、南渡した国都から近いので、世に名の聞こえた人士がたいへん多い。樗園劉先生は若くして錢塘に遊び、宋の太学に学んで、尊び親しんだのは同郷の閩風舒景薛、南山の陳寿の諸先生であり、友として敬愛したのは剡源の戴帥初と鄞の袁伯長であった。袁公は後に元に仕えて顯官となり、名は海内に聞こえた。戴公の文も当世に伝わった。閩風、南山と「身之」先生はみな自ら宋の遺民と称し、「元に」仕えることを潔しとしなかった。だから文章と徳行は立派だったが、世間にはあまり顯れなかった。伝え聞いて知っているのはただ同郷人だけだった」とある。閩風とは舒岳祥の

こと、南山とは陳應嵩のことである。二人ともあまり世に顕れることははななかったが、それでも同郷人は知っている。身之は同郷人さえ知らない。

『宋史』に「身之の」伝記がないことから、元代には名を知られなかったことがわかる。『元史』に伝記がないのと方正学が何も述べていないことから、明初にもその名が知られなかったことがわかる。成化年間（一四六五—一四七七年）に謝鐸が『尊鄉錄』を編集した時に、黄傳の『簡籍遺聞』は身之の名が漏れていると誇った。弘治年間（一四八八—一五〇五年）に出た謝修の『赤城新志』には身之の小伝がある。しかし『宋史新編』および『南宋書』にも補伝はつくっていない。焦竑の『国史経籍』にもまた『通鑑胡注』の書名は記載されていないので、明末にも彼の名は顕れていないことがわかる。元明の学风は綱目を作る者が多く、『通鑑』を研究する者は少なかった。考証学が起ってから、身之は始めて地理「の考証」に優れていると世に称えられた。しかるに厲・陸両家の編集した『宋詩紀事』には六、七千人の作品を収録し、元詩もまた数千人のものを選んでいるのに、身之の詩は一編も採っていない。『元史類編』および『省府県志』は身之の補伝をつくっているが、『通鑑注』と『釈文辯誤』の序文二編以外は、身之の文を収録していない。孔継涑が刊行した『玉虹鑿真帖』と高宗の書いた「徽宗文集序」には「龍舒故吏胡三省跋」があるのはまことに稀有といふべきである。跋には「袁桷の清容齋にて記す」とあり、袁氏の塾に滞在した時の作とすべきである。後にこの序は張茂実のもとに帰し、文徵明の跋が付けられた。茂実というのは張丑の父である。その後さらに王儼齋のもとに帰したので、孔継涑がこれを刊行した。継涑というのは儼齋の孫の婿である。ところが各家がこの帖を収録する際には文徵明の跋を載せることが多く、身之の跋は載せていない。文徵明の跋には身之の名も述べてはいるが、各刊

本の「甫田集」のこの文は「胡」の字の下に名を欠く。『清河書画舫』、『式古堂書考』、『佩文齋書譜』などはみな文徵明の跋を載せ、また胡三省を誤って胡瑄としている。瑄は字を德輝といい、毗陵の人で、劉元城の弟子であり、『梁溪漫志』は常々この人のことを称えている。『楊誠齋集』七九に「胡德輝蒼梧集序」があり、「陳少陽が上書し、德輝がその草稿を見て、蒼梧に送った」とあり、『鼠璞』にもまた「張魏はかつて胡瑄が添削した上書を奏した」といつている。この瑄は身之より百余年も前の人であり、清容と相い見えるなどということがどうしてありえようか。このような間違いが起るのは、もし原帖を見ないと、ついには龍舒故吏が胡三省であることがわからなくなるからだ。このことから、明代を終わるまで、「胡三省の」名はなお顕れなかったことが証明できる。だから凌迪知が著した『萬姓統譜』には胡瑄は二度出てくるが、身之には言及しない。萬季野の著した『宋季忠義錄』には陳應嵩、劉莊孫はあるが、身之には言及していない。錢竹汀は『南宋儒学伝目』を起稿しており、それには王應麟、黄震は載っているが、身之には及んでいない。『四庫提要』の『清容集』の項には「桷は若い頃王應麟、舒岳祥、戴表元の遺臣たちに従って遊んだ」とあり、これもまた身之には及んでいない。まるで身之は地理に長じている他は、言論・行動など何一つとして述べるに足りることがないかのようである。ああ、『通鑑注』全巻が立派に存在するというのに、地理に長ずるだけとは何ということだ。『通鑑注』は完成してから今日まで六百六十年経っているが、前の三百六十年は曖昧模糊の中にあり、後の三百年は地理に長じているという名の下に覆われた。身之こそほとんど真の隠者といつてよい。曾廉が『元書』を編纂した時、編別を「儒学伝」から「隱逸伝」に移したのは、実にわが意を得ている。『宋元学案補遺』に「戴剡源集」十八の「蕭子西の詩巻の後に題す」の一文に胡元魯の名があるのは身之のことであると

あるが、他に証拠がない。『閩風集』一に「同年の黄東発が楮衾を贈る詩」があり、二に「胡元魯の松石を惠贈せしに答える詩」があるが、同年を称していない。また身之の叔父の名は元叔だが、身之の別号は元魯で、これも似ていないようである。温公の実兄且は字は伯康だが、温公の子の名は康だった。このことを当時不快に思っただろうか。それはさらに調べて見なければならぬ。以上真の隠者について説くことにより、さらに身之の事跡の韜晦に及んだ^{（千世）}」

引用がたいへん長くなってしまうが、考証学的な論文では考証のプロセスが大切なので、文脈の途中を省略することは難しい。しかも、他の部分と同様、この引用した部分でも、決して無駄な考証はしておらず、細かい考証を通じて「真の隠者」としての胡三省の生き方が見事に浮かび上がっている。この隠逸に徹した生き方が彼の民族意識を支えていたのである。

しかも隠逸に徹して生きるということは決して生易しいことではなかったのであり、そのことを陳垣は身に染みて思っている――

「隋の煬帝の大業二年、蘇武ら六人に命じて吏部とともに人事の選任に関与させたが、虞世基だけが権力を専らにして賄略を取り、賄略の多い者は順序を越えて合格させ、賄略を贈らない者は履歴書を出させるだけだった。

注に曰く：仕官して以後の履歴を記入させるのである。宋末に人事選考に与かろうとする者は脚色状（履歴書）を提出させた。今これを根脚という。（巻一〇八）

援庵曰く：ここで「宋末」といっているのは、宋滅亡後のことばである。「今」といっているのは元初のことである。「根脚」とは履歴というのと同じ。『朝野類要』の三には、「宋の時期の脚色状は崇寧・大觀年間には

『元祐党に所属していない』という項目が加わり、紹興年間には「蔡京、童貫、朱勳、王黼らの親戚ではない」、慶元年間には「偽学を志していない」という項目が加わった。元初の根脚については、『謝疊山集』四に「丞相劉忠斎に奉る書簡」があり、劉忠斎とは「元初の」降臣劉夢炎のことである。書簡にいう：「当時中書行省は福建の、官位はあるが仕えない者に履歴書の提出を命じて屈辱を味あわせた」と。これは疊山が身に受けたことである。身之は疊山とは同期の進士であり、国が滅びた後は同様に隠棲して仕えなかったから、やはり同じ屈辱を受けるのを免れなかったはずで、身之も絶えず根脚の提出にひどく苦しめられたことだろう。^{（五五）}

異民族王朝の支配下にあつて、このような苦しみを耐え忍んだのは、かつて宋朝に仕えた彼の宋朝に対する思いがいかにか強かったかを示しているが、果たしてそれだけだったろうか。宋朝が滅びて二十数年、様々の抑圧や屈辱を忍びながら、『通鑑注』という大変な仕事をついに完成した彼を支えたものは一体何であつたのか。『通鑑注』にこめられた彼の思いは歴史的にどのように位置付けられるのか。これらの残つた問題に可能な限りアプローチしてみたい。

（二）中華思想と中国文化

王船山は『宋論』のなかで「漢、唐が滅びたのはいずれも王朝それ自体が滅びたのである。宋が滅びたのは黄帝、舜以来道法を伝えてきた天下を滅ぼしたのである」といつている。この認識は恐らく胡三省にも共通のものであり、王船山が「道法」と呼んだものは胡にとつても絶対に失つてはならない大切なもの、中国文化の精髓であつた。だからこそ、彼は「道法」の伝統を絶やさぬために、元朝支配下の二十数年間、『通鑑注』の完成に全力を傾けたものと考えられる。

『表微』の「解釈篇」から二項引いておく。ここには彼が何としても守ろうとしたものが端的に示されている。「周の昭襄王五十二年」周の民が東に逃れた。

注に曰く：義として秦の民とならなかつた。(巻六)

援庵曰く：『史記』の注釈者は大勢おり、「周の民が東に逃れた」ということばは周と秦の両本紀に載せているのに、これまで注を付けた者が一人もおらず、身之だけが「義として秦の民とならなかつた」と解釈している。僅か五文字(義不為秦民)ではあるが、身之の時代に生まれ合わせなければ、この注を書くことができなかったのである。昔宋が滅びると、謝翱(字は皋羽)が『西臺慟哭記』および『冬青樹引』を著しているが、解釈できない言葉が多い。明初に張孟兼がこれに注を付け、明の滅亡期に黄宗羲がさら注を付し、「私は孟兼とは違った時代に生まれ合わせ、孟兼は皋羽から遠い時代に、私は皋羽から近い時代に生まれているので、皋羽の言葉はもともと私の方がわかりやすい」といつている。だから諸家が注を付けられなかつたことに、身之だけが注を付けることができたのは、これまた諸家が秦から遠くなっているのに、身之がこれに近かつたということである。

漢の高帝(高祖)の十一年、陸賈が尉佗にいうには、「あなたは中国人で、親戚や兄弟たちの墳墓は真定にあるのに、今あなたは天性に反して冠帯(中国の君子の服装)を捨てている」と。

注に曰く：父母の国に背き、墳墓や宗族のことを心にかけないのは天性に反している。椎髻(髪を後に束ねる南越の風俗)をして蛮夷の風俗に従うのは冠帯を捨てることになる。(巻十二)

援庵曰く：これは宋末の「元への」投降者のことをいつているのである。〇二五〇

ここには異民族の支配に対して中国の文化的伝統を守らなければならないという使命感があり、この使命感こそ『通鑑注』の全編を貫くものであった。しからば彼の使命感は次のような見解とどのように関係しているのだろうか。

「漢の高帝七年、皇帝は陳平の秘計を用いて、使者をして閼氏に密かに手厚く贈物をさせた。

注に曰く：應劭曰く：陳平は画工に美女の肖像を描かせ、密かに閼氏に贈り、「漢にはこのような美女があり、皇帝は現在困窮の最中にありますので、この美女を「王様に」献じようとしております」といった。閼氏は己れがその美女に寵愛を奪われることを恐れて、冒頓に訴えて、囲みを解かせた、と。私が思うに、秘計なるものは中国の根本を損なうことになるので、「史書には」秘して伝えていない。(卷十一)

援庵曰く：歴史は真実を求めるが、時にはかならずしも過度にそれに拘泥しないこともある。およそ民族の感情を傷つけ、国家の根本を損なうようなことは「史書に」載せなくても、真実を損なうことにはならない。^{三七}」

ここで「中国の根本を損なう」、「国家の根本を損なう」という翻訳の原文は「失中国之體」および「失国家之體統」であり、胡注でいう「體」と陳垣のいう「體統」は同じことを指していると考えられるので、訳語をいずれも「根本」に統一した。したがってここで述べられていることは、二人の言葉使いに若干の違いはあるものの、基本的には相違がないと考えられる。中国の根本を損なうことは史書に載せなくても、歴史の真実を損なうことにはならない、というのはどういふことか、それで果たして歴史の真実が保証できるのか、ということとは大きな問題であるが、ここではその大問題の議論に立ち入ることはひとまず避けて、二人が異口同音にこのような主張をしているのはなぜか、という問題を検討しておきたい。

府が依然として非近代的国家政權の性格をもっていたことと、近代中国人の民族思想が依然として伝統的「華夷思想」から逸脱できていなかったことを証明している」といふことに現れる。ここでいわれている民族思想は少数民族の住む「辺疆」地域に対して統一性を強化する力、したがってしばしば少数民族の独立傾向を抑止する求心力としても作用している。これは本稿でこれまで論じてきたのとは一見別の問題であるかのように見えるが、しかし本稿の問題と表裏の関係にあることも疑問の余地がない。このことは遊牧民族と農耕民族の生活・歴史・文化の違いなど、複雑な問題を含んでいるので、別の機会にぜひ詳しく考えてみたいと思っている。

四、結び —— 中国史上の南渡 ——

日本軍と傀儡政權の支配下の北平の生活は八年間で、日本の敗戦によって終りを告げた。苦痛や不自由を耐え忍んできた北京市民たちは解放を迎えて安堵した。ほどなく国共内戦が再燃し、国内の混乱は続くが、北京市民にとっては束の間の解放感に浸ることができ、「南渡」して「大後方」に流浪生活を送っていた人々は続々と北方へ帰り始めた。すでに見た通り、平津地区の諸大学・学校の教職員・学生の多くは「南渡」して、昆明その他の地で国立西南聯合大学を樹立し、あらゆる困難を克服して研究・教育の火を絶やさなかった。聯合大学も解放を迎え、喜びのなかで一九四六年五月一日に閉校式を行った後、それぞれの土地へ帰り始めた。その後昆明の聯合大学旧址に記念碑が建立され、八年間抗戦と運命を共にしてついに勝利を勝ち取り、北方に帰還する喜びを歌い上げているが、そのなかに中国史上の「南渡」のことが出てくる。「歴史をひもとくと、わが民族が中原に足をとどめることができなくなり、江南の辺地に難を避けるのを南渡という。南渡した人のうち、これまで北方に帰ることができた者

はいなかった。晋人の南渡がその第一の例である。宋人の南渡がその第二の例である。明人の南渡が第三の例である。風景は同じでも、敵地では心が楽しまないのが晋人の深い悲しみであり、わが山河を返せという宋人の願いはついに空しかった。われらは第四の南渡に赴いたが、十年を経ずして失地回復を全うすることができた^(一九一九)。というのがそのくだりである。南渡して各地に移動を余儀なくされた人達と、北京に止まって日本軍人や傀儡政府の役人との対応に迫られた陳垣達と、その体験や苦難はもとより全く等質ではないが、しかしそれぞれの境遇の相違を越えて、共通する想念があったことは否定できない。全民族的な抗戦をささえたものとして、筆者は中国人の民族意識を重視し、その民族意識がどのように形成されたかを、陳垣と胡三省を例にとって考察してきた。もとより問題はきわめて大きく、なお多くの考察を必要とするが、今後機会がある度毎に補足したいと思う。

本稿を終えるに当たり、若干書き落としたことを補足しておきたい。本稿も当然多くの先行研究に負うところが多いので、そのことをここでまとめて述べておきたい。ただ日本人研究者の研究は、この後に述べる故・増淵龍夫先生を除き、参照したものはほとんどないが、これはもしかするし、私の怠慢で、調査が不十分なのかもしれない。お気付きの点は御教示いただければ、まことに幸いである。中国での研究は、『紀念陳垣校長一一〇周年學術論文集』(北京師範大学出版社、一九九〇年) および劉乃和『勵耘承學記』(同社、一九九二年)の両諸所収の諸論文、それに方豪「対日抗戦時期之陳援菴先生」^(三七)、『伝記文学』月刊十九卷四期所載)を参照しているほか、陳垣の経歴については、前述の二種類の年譜に負うところが多かった。彼は何と言っても大歴史家であるだけに、それらの論文は彼の学問について論じたものが多い。

最後に一言だけ、感想を交えて述べることをお許し頂きたいと思う。今回取り上げた陳垣の『通鑑胡注表微』という本の存在とその内容について、私に教えて下さったのは故・増淵龍夫先生であった。当時私はまだ大学院生だったが、早速本書の重印本（一九五八年、科学出版社刊）を入手し、その本は今でも机上にある。しかしその後一貫して本書を読み続けてきたわけではなく、長い間忘れがちであり、私が本書をふたたび手にして本気で読み出したのは三、四年前のことであったと記憶している。

ところで増淵先生は生前ある会合で「歴史のいわゆる内面的理解について」という報告をされ、そのなかで、「……陳垣は、日本軍占領下の暗い世情の下で、ひとり門をとぎして『資治通鑑』を読みそれに附せられている胡三省の注釈を読んで行くうちに、胡三省の注釈は単なる史実の考証というようなものではない、ということに陳垣は気付いたのです。南宋末の政治の腐敗のもとに生きて、宋朝の滅亡と蒙古人の侵入、占領支配の下に生涯をおくった胡三省は、蒙古人の支配下においては、山中にかくれて、一切の官職を辞してつかず、亡国の暗い世情の下にあって、元朝の残酷な統治と、それに阿附し、或はそれに抵抗するさまざまな人の動きを、その目で見、きびしい現実批判の心を内にこめて、『資治通鑑』を読み、その全精神を、『通鑑』の注釈という仕事に託したのであった。したがって、そこには、『通鑑』に記されている過去のさまざまな歴史的事件や人々の動きについて、或はするどい批判が、或は心からの共感が、胡三省自身のきびしい現実の体験にもとづく深い洞察に裏付けられながら、簡潔な、一見それとはわからぬ、注釈の形をとって書かれているということに陳垣ははじめて気付いたのでした。すなわち、それから相去ること六百六十余年の後であります。日本軍という、やはり異民族の占領下の暗い世情の下において、ひとり門をとぎして『資治通鑑』を読んでいた陳垣は、そこに附せられている胡三省の注釈を読み、はじめて、以

上のような胡三省の気節とその注釈の意図するところを、体得することができた、といっているのです。そして、元朝支配下に不屈の抵抗の精神を内にひめて殆ど隱者に近い生活をおくった、またその故に当時名の知られなかつたこの胡三省という学者の従来気付かれなかつた一面を明らかにする困難な仕事を、日本の占領統治下の北京において、陳垣は着手したのです。それが、陳垣の『通鑑胡注表微』という研究であつたのです。そこでは、『資治通鑑』に記されている過去の歴史的事件について胡三省の附した簡潔な注釈が、胡三省自身が生きた宋末元初の当時の現実の何を暗に批判し、その何に共感を感じて書かれたのか、ということ、同時代の文献を博捜することによって実証的に追求し、それを胡三省の注釈に対する注釈という形で——中国の伝統的な形式である「注」に対する「疏」という形式をとって——これまた簡潔に記したのであつた^(三十)と述べられた。

今改めて読み返してみると、さすがに簡にして要をえていて、これ以上付け加えることなどとくになさそうに見える。当時史学史の研究に打ち込んでおられた増淵先生は恐らくこの書物について、さらに詳細な研究をされる意図を持っておられたと思うが、残念なことに、健康の悪化がそれを許さず、先生は一九八三年五月に亡くなられた。本稿では、非力を顧みず、先生の御研究をいささかなりとも補うことを志したが、力不足は如何ともしがたく、ただ単に蛇足を加えただけの、まことに不様なものとなつてしまったことは否めない。もし今先生がお元気で、拙稿に目を通されたら、きっと厳しい御指摘があることと思うが、それが頂けないのは全く残念至極というほかはない。まことに貧しい成果ではあるが、先生の御仏前に捧げて、約三十年に亘る学恩に対し、心からお礼を申し上げたい。

(一九九六・九・三〇)

〔注〕

(一) 一九二八年から四九年にかけて、中国の首都が南京その他に置かれていた期間は、北京の正式名は北平であった。したがって本稿でも、この期間の正式名としては北平を用いるが、文中では時には北京を用いることもある。本年一月三十一日最終講義を行った際には、北平という名は若い学生諸君になじみがないこと、当時市民たちの間では一般に北京という名称を使っていたこと、などの理由から北京を使ったが、戦争中北京を支配した傀儡政権「中華民国臨時政府」が北京を用いたという事情もあるので、本稿では北平を正式名として使うこととする。なお、最終講義の際の題目は「日本軍占領下の北京における一つの抵抗」であったが、なぜか事前には「日本軍政下の北京における一つの抵抗」と発表された。平津地区は日中戦争開始後まもなく傀儡政権に支配されるので、「軍政下」という言い方は正しくない。なぜこのように変えられたのかは、筆者にもわからない。

(二) 中国人民政治協商會議北京市委員会文史資料研究委員会編『日偽統治下の北平』(北京出版社、一九八七年)、北京市政協文史委員会編『日偽統治下の北京郊区』(北京出版社、一九九五年) 参照。

(三) 『日偽統治下の北平』六十九頁参照。

(四) 西南聯合大学北京校友会校史編輯委員会編『国立西南聯合大学校史資料』(北京大学出版社・雲南人民出版社、一九八六年) 参照。

(五) 陳述「回憶陳援庵老師的治学和教学」(紀念陳垣校長誕生一一〇周年籌委會編『學術論文集』所収、北京師範大学出版社、一九九〇年) 三二五頁参照。

(六) 陳智超編注『陳垣來往書信集』(上海古籍出版社、一九九〇年) 所収。

(七) 主として「陳垣簡譜」(『陳垣來往書信集』所収) および王明沢「陳垣事跡編年」(『紀念陳垣校長誕生一一〇周年學術論文集』所収) と同論文集所収の諸論文による。

- (八) 中央研究院中国文哲研究所 (台北)、一九九二年刊。
- (九) 『陳垣来往書信集』一九二頁。
- (十) 『陳垣事跡編年』五一—五頁。
- (十一) 新文豐出版公司 (台北)、一九九三年刊。
- (十二) 本書は最初『輔仁雜誌』第十三卷第一・二合期(一九四五年十二月刊)に前半の十編が、第十四卷第一・二合期(一九四六年十二月刊)に後半の十編が掲載され、抜き刷りの合本が作られたが、単行本を出版できる状態ではなかったということである(『勵耘承學錄』三四九頁)。本稿における本書の引用は重印本(科学出版社、一九五八年)による(以下『表徴』と略す)。なお、本書の構想は一九四二年から練り始め、四三年に資料を収集し、四五年に完成したということである。
- (十三) 『陳垣事跡編年』五〇—八頁。
- (十四) 『表徴』九八頁。
- (十五) 「本朝篇第一」、「書法篇第二」、「校勘篇第三」、「解积篇第四」、「避諱篇第五」、「考証篇第六」、「辯誤篇第七」、「評論篇第八」、「感慨篇第九」、「勸戒篇第十」、「治術篇第十一」、「臣節篇第十二」、「倫紀篇第十三」、「出処篇第十四」、「辺事篇第十五」、「夷夏篇第十六」、「民心篇第十七」、「积老篇第十八」、「生死篇第十九」、「貨利篇第二十」。
- (十六) 『表徴』一—二頁。
- (十七) 堀敏一『中国と古代東アジア世界』(岩波書店、一九九三年)、とくに第六章、第九章参照。
- (十八) 『表徴』三〇—七頁。
- (十九) 同前、十—十一頁。
- (二十) 同前、二二—三頁。
- (二十一) 同前、二四〇—二四二頁。

(二十二) 同前、三六六～三六七頁。

(二十三) 同前、三七八～三八〇頁。

(二十四) 同前、六六～六九頁。

(二十五) 同前、十頁。

(二十六) 同前、五十八～五十九頁。

(二十七) 同前、二八六頁。

(二十八) 王柯「二重の中国——一九三〇年代中国人の辺疆認識の構造——」(『思想』一九九五年七月号所載、四十三頁) 参照。

なお、加々美光行『知られざる祈り・中国の民族問題』(新評論、一九九三年)、とくにその第二章・Iおよび第三章参照。

(二十九) 『国立西南聯合大学校史資料』一三五頁。

(三十) 『陳援菴先生全集』第十六冊に再録されている。

(三十一) 増淵龍夫『歴史家の同時代史的考察について』(岩波書店、一九八三年) 九十～九十二頁。なお、増淵先生はここで、陳垣の方法について、「注釈に対する注釈という形式で——中国の伝統的な形式である「注」に対する「疏」という形式をとって——これまた簡潔に記した」と書かれている。陳垣の方法は、伝統的な形式によりつつも、『通鑑』の本文よりもむしろ胡注を考証・分析の対象とし、それによって胡三省の思想・学問や行動の根底に迫っている点に、彼のいう「表徴」の著しい特色があると考えられる。

(補注) この「蒙古軍政府」は確かに日本軍の影響下に樹立された政権であり、基本的に傀儡政権とみなされるが、しかしこの政権の中心となった徳王を始め、参加者たちには民族自治ないし独立への強い願望があり、彼等の運動はその願望を実現するために日本軍その他の勢力を利用しようとしたという面も無視することができない。ドムチョクドロブ『徳王自伝』(森久男訳、岩波書店、一九九四年)とその「訳者解説」参照。この問題については別の機会に考えたい。